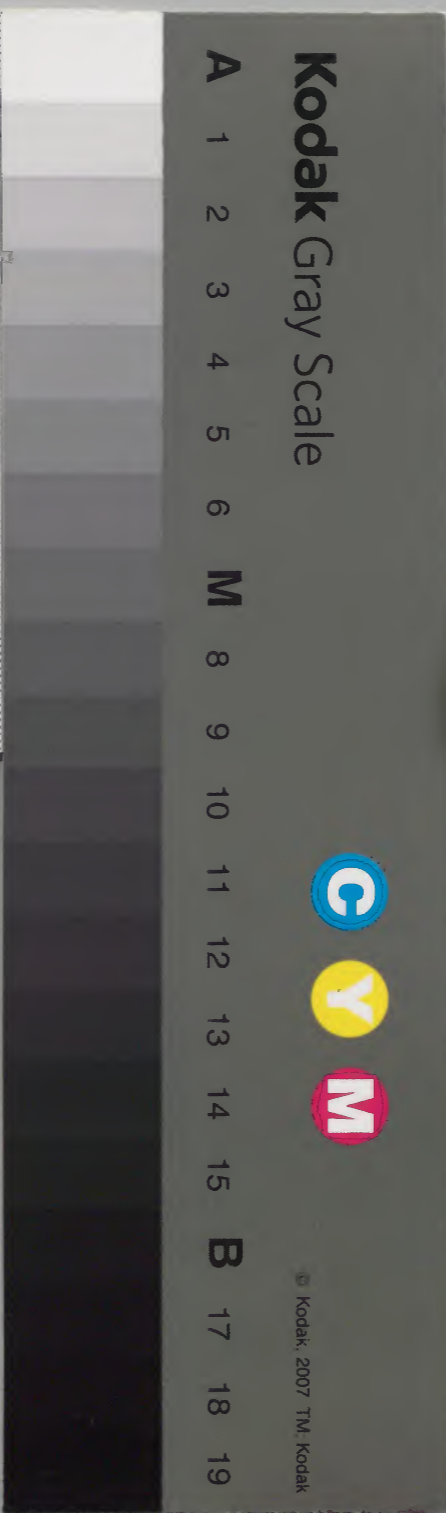


五月廿五



庫文内			
三	二		和
函	一		
架	冊	號	類
(五五)			

内閣文庫			
番號	和	28420	
冊數	100 (55)		
函號	211	300	





明治十二年
四月

楹尾卷之五十五 正往

後漢魏桓

漢儒泣書

声如

富地の巻鴉

在州本坂大楠樹

春秋の彼卷云

春の以母の事公事有々

蓮社傳

泉州堺祖蓮社

先君源誠公法諱

内学外学

因縁の字義

落草折合

榎室連

彼卷中日小談一考

三竺磨阿摩陀磨

庭の縁梅咲る事云々

日本浄宗蓮社傳

大樹家蓮社傳

某寺爲某院爲事云々



戒名道号

性名延臣切ありて死す

天皇我詔旨良万の刊

陽や山山神神也也法法力力賦

善善果果異異善善道道善善法法の記

ももくく本本のの今今事事

よよららのの大大事事んんねね根

其其のの法法有有れれたたとと法法のの事

根根のの老老婦婦者者をを法法のの事

是是田田宣宣政政位位のの事

友人友人端端年年のの法

二字の法名

我國我國古古姓姓付付るる尸カミ

傳傳典典のの法法名名のの訓訓意

能能那那のの法法名名のの訓訓意

法法則則夫夫のの説説法

或或禪禪信信のの法法名名のの訓訓意

よよららのの灵灵怪

極極少少のの法法名名のの訓訓意

甲甲午午年年退退院院のの法

淑淑室室為為婦婦人人少少祥祥忌

弟弟黨

仙人條

其其のの法法名名のの訓訓意

娘娘のの法法名名のの訓訓意

正正徳徳甲甲午午年年のの法法名名のの訓訓意

甲甲午午年年のの暴暴風

甲甲午午年年のの野野分

孟孟子子のの法法名名のの訓訓意

孟孟子子のの法法名名のの訓訓意

孟孟子子のの法法名名のの訓訓意

○後漢魏桓不肯仕鄉人勉之曰于祿求進以行志也方今後宮于數其可損乎厩馬万匹其可減乎左右權豪其可去乎慨然嘆曰使桓生行而死還於諸子何有哉

朱子語類百三十五

鳴心道を以て傳へたるは漢の時程形の如く
況や季世を以て陳付りし太史の謗を以て官者
の勢を遠くく是を以て詭遇するものを知るもの
如くはしるは豈に物と官よりんや君子の仕
るもの宜しき哉

○内学

災異識緯風角
鳥占ノ類

外学

六經義理ノ学

是漢儒の稱也 釋氏内典亦典の類なりや

○漢儒注書只注難曉處不全注盡本文其辭甚簡
類語

古人の注氣志勢之後人の注氣志勢時風如形
其後世の注を以てして其代の文字を以て
其注を以てして其代の文字を以てして其
亦多くなれ漢者多岐の迷ひく古の注を以てして其
多し其や閑義の偏を以て自家の情を銜其
已をあらわし人をあらわしむ

○或人云固菰の字義其よるは漢其ふは古何や
予曰因に申し縁は菰を以てして其の意豈
一たしんやを以てして其の種子の如きは根枝を以て

の由来として其生ずる理を具すは水土の固
循せしむ其芽生ずるは然りと然り事物の
成る皆固ありて縁を以てして其の意

○固ハ芻の本字 芻ハ俗也
声ハ音慶 ハ声乃字今聲の
妬 音石女無子者曰妬俗誤く
妬忌乃妒又妬を用ゆ かなんか

○一休乃侍は四十九年落草坊 落草ハ不在正落
洞山の注は折舎飯炭裏坐 折舎ハ畢竟義
方語

○禪の注は富地の老鴉とて其の閑口成福を以てして
其も其れやも其れは舌の福多し古唐柳子 福也
如く老しく口を異るものも其れ人の身も其れ福あり
但し言責あり土木夫可言して云々其れ福位観念也

才を堂表の巨たしんや 不好者

○ 榎室連の姓は上宮太子少傅風巡行の時水主の古麻
呂の森の門に大松樹あり太子曰は樹は室の如し大
雨も漏れと依く榎室連より姓を紹ぐ此姓氏流
十三 少治きりしは我が國いより榎を人森と稱す
るの多枝を伐ひ孫惣茂すりる在枝の本を呼て人
風ゆりより利ありとす

○ 志江國本板けがより上りの方古大楠樹あり 民家の
多御き所凡岡十七島ありとす亦伊勢月夜乃森
内家の月 古大松樹ありて一國知るるも此木より
去る自居の秋暴風は轉倒せし者二十餘りあり

凡そ古地より傳りなき大木もあまたん

○ 甲午春の彼岸會中日より入日かしくまはえ
侍りるを重く彼三障のまゝ立おるはる外地
侍りしり

いづつ日暮らぬとや戸の燈を
こころふささるる重くかゝるあり

○ 凡そ厩が春秋の彼岸を記しるの久し春
分秋分の日を中日よりりや廿二日目を初とす
春分見えしを世に春秋ニふり二日目を初とす
目を中日より定めたりと終りしとあり
日とあはれ目より北より目を延く次の日とあり故

其の初... 古き曆を記し

真喜曆は、日月を用ひて存せり... 隔く彼者の初を記す

亦彼者の中日は日輪西面を以て淨業日想

観の時より... 觀の時より... 觀の時より

ハ春分の前日秋分秋分の後二日... を行たらしむるより

を日と抱かしむる日北西の... 其日と抱かしむる日北西の

○ 乙未の曆は一歳を二季とせり... 熟時 自四月 茂時 自五月

八月 寒時 自九月 至十月 され先正九月は印土二季の初月なり

何弟陀木の曆は、二時を六十刻と定め、西の

一日の初とて日月を二季とせり... 法あり

あり或建寅の月を軍首とす... 始とす

尚も自元月より... 二月の首と定むるも

○ 春の比おのりひはありて... 今のみより

多かりしはありて... おまき

たつて... たり

○ 庭の縁梯以初く、いすこ盛たし、さうり烈しき
風はさるる水良、いふをく侍り、こゝろ世のさしめ
さすも、こゝろ不覺、水侍り、

為たし、ぬ世をさす、こゝろ梯を
いひ、いひ、いひ、いひ、いひ、いひ、

○ 蓮社傳

晋正覚圓悟大師 雁門、惠遠 住廬山席溪東林寺招
賢士修西方淨業其地多白蓮華且弥陀佛國以
蓮花分九品接新往故大師稱其院曰蓮社 或云會
不為名利 泥汚汚喻如
蓮華清淨故名之 亦大師門人法要巧刻木為十
葉蓮華植此池中用機關凡折一葉是一時与割

漏無差俾礼念不失正時故名蓮社社結綜聚會
処假之為名

唐詩云大道本来無所詮白雪那得有心期遠
公独刻蓮花漏併向山中礼六時

○ 日本淨宗蓮社号傳

釈白蓮社諱圓心京兆人未詳其姓族德宇宏智
鋒爽邈然不嗜世味唯好顯密妙旨既洞晚投鎮
西聖光師修淨業久矣四條院天福元癸巳歲三
月從國使橘尚書入宋 理宗紹
定六年 登廬山謁睿禪師
傳衣鉢而皈朝自号白蓮社淨土宗社号權輿于
此且師乃廬山義祖也 光師門人亦有敬蓮社等
盖自此時社号同在

○勅額扶桑廬山大阿彌陀經寺閩山等一祖賜紫
特号加蓮社大乘澄圓大菩薩智演國師大和尚
泉州大島郡產也姓源左曲既義氏之裔泉州刺
吏義負男母百濟氏傲無嗣禱泉州家原文珠大
士一夕聞兒啼庭籬便開戶舉以為子五歲親文
墨暗誦曼殊神咒周里嘆異為師梵相奇偉性悟
而畧因九歲入東大寺師圓雅公而薙染授具長
惠解天然才氣秀逸研究俱舍唯識圓奧洞徹三
論花嚴妙旨既而至禪尾山精練兩部秘教且善
悉曇字義然傳台宗於兼遍觀蒙二師每友東福
席関公親敲禪要且久學淨教浴九品西山二流

亦遥游東關謁鎌倉光明常譽大和尚循其掣割
稟鎮西正系自尔名望新而盛弘通淨宗勸以稱
名一行花園帝文保元年丁巳泛溟洋徑入元宗仁
延祐四登廬峯見東林憂曇普度大師學輪下而面
授無辺海藏口决傳仁國惠遠之正脉剝蒙教外
證許在元凡五年巡歷名黨勝區得謁師印可於
此仁携三藏證因將來仁舍利遠公傳持六時礼
蓮華炉及衣盃文籍若干飯朝寔後醍醐院元亨
改元辛酉也其後明極同帝召教聞去内外謂仁家舊
鳳僧中龍席帝崇其道德正申甲子元年特詔創
梵宮勅号加蓮社以精舍呼蓮社普救天下冷修般舟
我國始于此

三昧益轉縈英發後村上院與國四年壬午北主
元天變地夭疫疾比屋愁苦天倫悒宸襟便余演
公禳災師忘命昇九禁奉授一乘圓戒使王公以
下士庶七日唱一百万遍念仏忘時妖氣忽退消
四民呼万歲帝感激之餘特賜大衆澄圓菩薩崇
号被紫袍且叡宣宸家翰寺額号扶桑廬山大阿弥
陀寺其封書曰法師遠涉滄波覆異聞於絕域遐
游唐縣研妙機於碩師宜施食封百戶云恩榮
之盛亦如斯師名翼四布振弥天威風丕漲吉水
法流挑廬山傳燈淨宗中與誰出師之右乎我國禪
淨兼學道場以祖蓮社為先屬洛東花後龜山院文

中元年北主秋七月廿七日師召大衆而上堂
遺誠普說不異平日端坐合爪而辭衆向自影唱
仙名悠然而坐化報壽九十有余歲嘗述十勝論
驚覺論獅子伏象論拂風論等若干帙藏宝篋今
皆行世

○大樹家蓮社号

- 東照宮普殿 德蓮社
- 台德院 光蓮社
- 文昭院 順蓮社
- 有章院 照蓮社
- 貴介蓮社号

中ノ貴族ノ彼ハ公倉ノ形勢ニ何モ士族ノ心ニシテ
日蓮堂ノ私ニシテ其ノ心ニシテ

古例院号の上ノ右位と申すハ法号ありやと人々
曰相如謙余泉ノ倉ノ意恩院ノ牌名の中ニ

贈正二位大休寺殿古山源公

是足利直義徳山法号と稱すの法名也 此公獨院号の
上ノ右位と申すモノハ其ノ次

○法名ニ戒名あり道号ありを以て中世中ノ貴人
ニシテ其ノ三字の法名ノ外別ニ道号と申す事ナク
坐穿白道長云の法名を行賞と号し 西田満仲の戒
名を満庵と号し 勢也と号し 居士家別號して房号

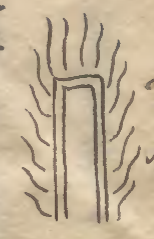
法名を付する方々ハ其ノ能登ノ法名を法力房と号し
稱し 勢也 此ハ法力並生法

○謙倉將軍家の時宋の祿位多ク本姓トシテ道号
を稱す其世ノ貴人ノ如クも其ノ三字の法名持たざる
あり 二位尼 平政子 法名を如実妙觀大禪定尼と号す
一勢也亦小糸卷時ノ位牌 謙倉老尼と号す 其ノ
過去觀阿禪門 過去ハ法名あり 此後世ニキ

とあり 亦經時ノ牌子 謙倉老尼とあり 是ハ其ノ寺号を
申すトシテ道号ハ 福宗ノ寺トシテあり 其ノ
寺号トシ

蓮華寺殿安樂大禪定門 かく題あり 淨土宗者ハ 其ノ三字の法

志ありとの中形も門徒
の姓名のこゝし 又いへば一の位牌は大方雲日首也



形の如し 祿宗盛んふ具くし 大人有家の

法名も居士号もせしり 七徳宗は山效く居士を称

して衆もを按する 中阿含經より利利梵士居士工師士四

姓く 長阿含經より利利羅羅門居士首陀を以て四姓と

なり 居士の譬喩經より所謂毘舍と同一は高賣市

人の稱呼も亦長阿含を按する 營生居業多積財

室名為居士と云ふ 普門品抄にも居士を多財居

業者也とあり 但云居道居山居村之士等と云

中居道士と云ふ 又いへば友人室作るとも居士也

仕友の稱呼もあり 次居士と云ふ 道家の科ふあり

稱するは此先庶人として道を修むる者も居士

といへば可なり 今公に大夫と云ふは居士と稱するは

是を彼と云ふは何の事ありん

○我國往古延臣切ありて死すれば 讎辭を初いへ

号もして 溢名意原不比等 公名なり 東三条按政 兼家

入道して ぬまを法諱あり 大方釋氏法名を

按けしあり

南朝の時ありて 溢名号の典あり

○我國古く姓より カネ 連 カネ 連の勢 カネ ありて 水を以て

姓の言界を カネ 官人罪ありて 尸を界く

ふ カネ 續日本紀 四十 号ありて

○ 怒海原足シラハラス 祢箇麻呂ニカマロを降して連の姓を賜ふ

○ 宣命シラハラスの天皇 我詔旨良万止良万とありをスメラガニユトラ

シと改事有識者ヲ傳ふは勅旨のニ字をニユトラ

と訓たり善本和言 善本 詔旨止良万をニユトラノリアラシ

勅旨をニユトラシと云ふ凡そ有職家の名目甚談

方を傳授せしめて私に唱方時必能談多くて知

者の多しをとりて無きなり

○ 儒典を菅江清中ふの家古し下り談事より訓点

あり仙書ハ山門寺門南於亦各自を傳方ありて相

混せしを世に傳ふは世々く私談を之理を遠く事な

しといふも職者ハ為ふ能く人な

歌書ヲ談くあり事言ふ談くは

○ 瑞雲山の秘法瑞雲の瑞雲 法身拭くくは

付書甲子雪峰和尙其具しりて水傳りて

白布甲子を手にてを拜禮せしる堂の相ふ事傳り

春風吹花拂 拭赤檀聖儀

曉林殘月觀 瞻紫金灵光

三十通ありの若法書も猶も法を以て傳りて

櫻の枝よ法に付侍り

法と云くありて法を以て傳りて

たれふ事すは世々のありて

後涼古のありて安嘉門院後言 安嘉 非親 名ハ邦子の法水出川

院 抄の位才油之始産心の女
名陳子三有十有世也 悪所へまうひらるを始ししこ

彩世世の美像子禱まひらるふ仏告ふしりけりて
けり水 法をたしりしと

○熊野より侍る人のと 手中を楯を侍りしりて
良之節より流傳り

志田川 流傳りしりて

ふらるるをしりて

○葉粟の曼茶羅流傳り 村名此の故 藤村より有日 本州
の傳りしりて

府山の古法西山壇外の名蓋也 宿春のまき道しり

けり神を思ひ立の志をかきりしりて侍りしりて何し

の西をけりまはるふりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

ア〜侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

衆を抄して出侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

杖端より侍りて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

波の名承りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

けり様をまきしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

〜侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

か〜侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

生田の社に侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて侍りしりて

高助敏信の男侍格も信安こゝろ繁く居候へば
妙上田郡をを止しといひたりしと云ふも息大
和守信武松見院の御末國と不和の年此等あり永
祿二丁卯やあつて亡き侍りし物なり是れ
て只好意の刻のこゝろ其の字は 直生 生 繁
のこゝろもあつては下百能妍を年ふも其之れ
一丘恨をのこして成り候なり其神をいふも人
の世は定りなき事も何れも物々し侍りて
蕭々荒郊喚鳥飯 人民城郭古今非
當時誰裁相條下 一片曉風柳絮飛
きりり初風ありもきりきり重々津

秋をくぬ神ふを候とみし

芝原村をたゞりき言惟庄乃のぬ高良といふ里の
名仰りて葉林緑流一蚕養の業民多かり候や花
窟の思ふとく其も候きもとてをかくし一風をよき
侍りも候と云ふ其の忘るしとて天津罪人の懸
たし右の方の寄本は 住法ありてこゝろ 稲並此
て形や 俗に天道 大津津日子布ハ稲並之別尾
張國別祖と和洞の形にハ侍り國民毎々ありて
意を求む侍り法神あり 予如の喪いしとて一関を
終りて其の元も糸り侍り候なり 打とけり候なり
意多かり候なりも 酪杉の意あり 能保茶 石原のいみ

しき名に阿くはしるも祖并の徳を承りきふ是を
きて飛保より志侍りて難唐ふりて倉隈いりて
本立物よりて望眼望し山密りて麟鳳栖り
家けて凡百を成と山門のふく神廟の製り初は
抄榜あり先西島影よりて案内し作りしを
しりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
よわりの才地方の梵言彩節難ふ坊舎凡そ十
三院東西小はしりてしりてしりてしりてしりて
長廊昼静りてしりてしりてしりてしりてしりて
磬音隠りてしりてしりてしりてしりてしりて
おしりてしりてしりてしりてしりてしりて

弥陀をふ仏工ありは西生を爽侍に衆空夫の時
彩小伴りよわををらりてしりて

ゆくゆく香檝りて九ねりてしりてしりてしりて

紺殿風回静玉炉烟絶薰一併弥陀仏他祭事云々

三祖 善導和尚 東漸大師 善惠國師 の真影をぬりて山山ありて祖天真

業運上人の像を掲ぎ師を花山院内大臣を師徳を
の令る西山の正徳を傳へ名を二世と高かりて山身を
奉りて多福をりて勝をりて後院礎をりて特よ空徳を
仰いで恩栄をりてしりてしりてしりてしりてしりて

康永二年六月十七日 示寂しりて才七世を先上人の時
寛正 後在皇在院 年号 三年六月廿二日 示寂しりて銀經の爰

相を感得せり是より日輪山曼荼羅寺と銘号行じ
或云高橋 後奈良院と云ふ三月廿五日勅形乃編
命を下し官寺に列しあひ九ハ曼荼羅の風高く檀林
の意を以て肩笈の学徒文を接し叔曼荼羅寺に
あり侍りしは院主炬筆 出世の傍像をして法性
かけしむをくねしおわすり丹を花法しして慈
懐を以てき輪函月朗して白紙をてしは六精の
なきに聖國の向ひなきも又國海にけりしは八万四千の
相海とてたし又普捨の恩光を照し六十万位の金山
時又能親の美甚とありし大慈大悲の尊密中くこと
たふかけてもなきしに安んじ計りてをねまきし是より方

たより院主を礼し良言交し 経を以てを授け給ふ
あり志満かき法を以てありて宝庫の真像も益々
ありしは是を慈恵とて拭床とてを置くにありし西方三聖
の大像も益容 七尺余 顔輝の尊にして南山第一の什宝也
按し当國部田移福達寺の三尊を山にまきしは
此を曼荼羅寺の大ニまきし對する名号なり
其他思教牧溪の益國野山方沙画公傍於の真像北
殿目の涅槃像も世に希有の真像なりまきしは
違あり亦高祖在漸方沙境の法影としていし
肖像ありは次自益自 贊也 亦園舎の中ニ造りてありし
文殊大士の法也の八像 瑞籙ありし現ありし靈像と

かや粒かしのやまのなまかや巻の記乃くをを
上代との編旨武持の謗交金田の常を誦法塔の光
を増眩して院主の跋坐を為謝し侍りて

かひくえをいふむすひし法のみ
婦うくや世りふちきりさるん

上人のせしふ

法の水なり水の来もふくきえふ
むすふちきりは世くは徳き

かくて四東動も立降りて息ひをりしや日西ふ
傾きそんと門を出ては節南ふ向まもりも立をいひて
おくり物をしりし強くあふまもりも立をいひて

は世をたしめおし格やなりれんいにせりふ六道の
倉里小きまもいひて三業の罪を食り侍りて沙羅樹に
かきたしめりしもまをうけりしや思ひきりふ半日
の鹿も鹿きつ差の表を領し侍りて塵のあたる
心地すれ物法光風ふ誦し古池野を理りて赤巻
子村ふるりて七幡方の大慈寺ふと赤りぬこを尚
國三十三石の一區して華詩大沙仙里侍りて
正觀世名を必並しあふも護摩壇上性悪念怒
の法形世ふいしりく赤巻子の村はは是徳も依り
とせん彼是おうこまわもりふも偈大悲救世の妙巧
いとくは侍りし永き日も今ハ峰をく落てまのを

花甲のまゝんゆ小折石仏思ふもいふ可きを多し苗
代書とていりて民の救済とていりていれぬも傳福の
資を修て耕稼の業ありていりていれぬ百民の上小
肆りて芳役の勤ありていりていれぬを忘るるもいりていり
世を怨し勢を經信しんや信老々く思ひの罪をん
事を惶ま公威とて知曉しんを省に誰に世に
罪を招く人やや紙已公威水も信く去殘軀白雲若
子保たてふ是非の塵をうく絶えんやあし極の經
き世にんゆききすこと信好信とていりていれぬを
初してのといけく思ひていりていれぬを

睡蝶夢遑轉別春 遠山長水憇行人

落花眼底风光晚 新見孤螢點綠蘋
あしりていりていれぬを

○ 龍岡上人 号主 以智 京より来りて卯月の初り法席を
坐す日、唱導ありていりていれぬを 衆の目
極を息とて去りて送り侍り

あまの川 蓮法はあしひ乃もあかひ
たうき世うけくむすふ七きりた
五月才下壽屋ふの法法おとりて回向侍りていりていれぬを
訪寄者一首を詠して志を述侍り

鷲峰雲尽耀金輪 遠本新識五百塵

無滅無生亦無跡 清風特地自天真

浮世もよころり留てしましひし刺

入ると是をたそし物乃其の月

ナチの砂陀感應の日本心をもく人々修治の志

侍甲より放生を勧む侍りしとありし多く枯葉に

中よ或は法料足の色に帝の日の放生をたす小

恨みおとすとて

守神いしよ法のすし水の友を名

たましをたそよとふちるき神つを

あしをた

せよとそる命もいしよとふとて

あまかくし妙む君みしを

せよかたのくは伊勢の宮に掛りよとて

ふゆ花を御む悲雀を弾射し水も橋く在魚を網

罟をん秋流の情あまをせんをさしをつ飛を放く

横江の危を免くは群機を深くて魁選の業をゆも

信物命を活し給ふもや厨の膳を信く倉はらの

とこころかきしは流の五忠公あつてやいありき齊宣

鞆ツリガリの牛をわたりしを孟子其公を民を保ち天下

よまらふとてしよとてしよし以泥江ヒコガタ縣のありて

刺は雀の雛も並居て鳴を鴉忽ち振かりて食

りんとてしよ雀ありしとてあまかきしよけしといふ

○ ちやくなすひし人 夷俗國 言類 稀り住て久しく
 逢きし〜思ひけし詠よあはれ侍りて美しき
 かし男とてまじり侍りし歩ひよりけり〜おとく
 侍りし〜侍りつけて文書し〜中道りぬ
 か〜山つまき老の影ハ見侍
 人をあはれも〜ぬ氣吹

○ 或得信は移りて池原月影に松姿をのり〜
 公の塵も〜計り〜主の借風月又君
 公をり〜侍り〜

風入古松靜 月生池中圓
 由来是風月 兩箇自然こ

○ 古人云より川たふ事〜を思ひけり
 一言 芳談 夢ふけり〜

あまのり物少〜
 ちをたを〜

○ 俗云弱めの靈怪〜維摩經の譬如人
 畏時非人得其便〜凡人事物小怨畏
 時怯は怯弱〜山鬼を任〜

○ 甲午の春老如生浦 土居 の民秋心を立 日蓮 真心
 派〜やりのあ〜多〜
 駿河桑の村 小外 所 代 所
 秋心を公 志 志 志 志
 吏 能 志 志 志
 志 志 志 志 志

去程を尋ねての事なりと云ふ
契利斯當の佛法を弘めんと欲す
凡そ日蓮を悪く称する者其能感古今一二ありは我日本の
邪道なりとの國賊と曰徒たんとす理

○天靈師知識を唱て極楽家寺の臨濟を流傳
甲午五月朔日より勸目子首流傳六月廿日
荒安寺の上堅空 臨濟を流傳りて即名をとりて

有機而應 依感而通 于幽于顯 同證圓通
とて諺さるる 序あり 三月四月は丘陽系亦在事

林頭孤月拂烟波 一片皈心別恨多

流水有期誰能定 奇峰添淚白雲歌
わづれよを因一旅旅のゆめを
おもひとてよ衣の口の涙を
師も名跡なきとてさくわせ

離筵掩淚有餘法 折柳挽風愁緒多
一錫隨緣水雲路 山前江山入飛歌
かまはれふこころをいふとけいひ

一玄一別水上の萍のこころをいふとけいひ
中二重池の云をねがひてはまはるる
あつた

明徒他日若くは... 隆人... 左右
小侍の言辭容止法の鄙態を極め只無事安んずるを以て
昼に徳を以て復君臣の礼を中へ巧言令色を
事として心之に賞賜を貪り侍りて其言を極め
樂之を以て友爵位用ふ此國事の外長久の事
三月より四月に至るを視し... 必之戒め
奸佞の類... 國政... 必之戒め
子孫... 庶人... 其
身を備へ... 無事... 猶偏を死んで
徳を... 人... 其
亡し國を敗る祖元の祀りを絶つて... 其

○ 淑室藤孀人小祥忌之辰恭拈一瓣香

雪峰

枯片炉頭一線風 遍薰十劫覺輪中
逍遙自在垂天繖 松簪夢飯只碧空

奉和

炉上引愁古林風 殘鐘夢暗紫烟中
驟隙迅駒追日月 一片清輝往事空

因法来云... 一百万遍の聖号を唱へ花鬘を嚴
飾し威光を増輝し... 其
蒼山... 其

青冥桂月照空状 白雨洗蓮薰仏塙

百万称風滿沙界

天冠地履自清涼

忌日ハ初秋大忌也中元の前也其日在出公静か
折かふ侍りふ水邊月の中言先世の徳目をむか
つて追志の心を以て修しおのけ日古雄山小
竹く徒衆を侍り檀園及び晨粒神撰誦經念
佛をといふも侍り鳴ゆる去途といふ花地を祝して
年代も初王侍りてをく六増を奉り程と回轉し
まわらばもいとゆるくなく杖雨の衣はくもたを世
もとて一内よめまきまき神をまき侍りて

たつて原ちまき神をおもひま

はゆるはきまき神のむきを祝

或友のこころはかをあたはりて

萩のまきをうけ初秋をう

いふこころは神のまきはゆ

とやまきりるもあたはるる

○ 友なり人むけりく末子あり婿年の口舌あやしく

この水舟ふまはるる

六月のま稿

三年為客自堪憐 強對蒿華淚潸然

官舎蕭々愁卧程 不聞郷信却聞鶴

とやまきりるもあたはるる

客情入筆幾回憐 武野懷逸眼悄然

孤枕蔓飛千里月 曉窓空聞一声鶴

○ 蓮葉葉としてあめりてきき花をてを採ふ是を茉莉
 かきくふふあまといはせや唐土の事を考す下花
 容よりり花径及び蓮生八歳ありて万真珠葉一名
 魚子葉といふは是木なり

○ 仙人條 西陽雜俎十名を採りていとは今何の採今ふたの凡こ
 西國にて野火灘といふ大ふやけりまたりとや

荷包牡丹 一名魚兒牡丹 けせんをかり

長春花 花径を採りては俗にいふとての長春をとりけり
 是金盞草の事なり世にきんせん花といふ

秋牡丹 蓮生八歳を採りてはあまのきくこわいらいきくきくを
 さわくの和名ありまの菊ありては花きくの也

仙人掌 花径を採りては俗にいふとての仙人をとりけり
 大なりといふ事なり 總木 蚊子樹 蚊の子をかり

檜 檜といふ名ありて又
 別の木あり 檜 ナラ
 タマツバキカール肉の也

檀 ハシノキナリ
 リヤウホウ
 ハタワ
 ミニ
 タマツバキカール肉の也
 コキ
 キンソウ

淡竹草 あまの花ほりては俗にいふとての淡竹をとりけり
 さきききとていふ事なり

前小茅苗一ノヤ忘き一在ま一ニ忘毎は

○ 甲午文月九日のあしより野分いりて吹く物強し
 今作る程風志のやうにりりせり程山もかりてかす
 物も一三河並江以北の亦の雨風とて洪水おひりり
 粒日粒の雪にも結付る民家の慈きことと先付るふ
 渾今ハ風を待ぬて候ひあり 南風小候く許きあり
 負の候をかり網するに利あり
 此はハ慈毒雨なりて虚意たりもはれを何をり物にて
 涼く歎きあふりりりりては作るやハ袖う秋の初風
 急しすしと先付りりりり物ま付待り

鐘遠烟村老樹幽 雨暗雲嶺夕陽収

素風林下微涼夢 喚起一声芦荻秋

○ 靈中くはるる時を立おひし雨あらしきく月啼りし

く市門寂しくして杜人可笛の音も劣り作らば十

の夜初て元夜澄て月さそやふ秋の灯もと首一歌の

多沙なくりくく丸るたおも少かる 麻下風俗十三四五六歌 強情は

市井改修物供回 新涼拂席世縁去

乾燥槐夢轉為昨 隻影月空白首翁

孟東滕會排勝を幸てかぐん

彩やまき玉樹法沼布在華

蓮池落爽眼界潔金風度

蕙階霧霽靈臺靜志月沈

○ 又月中はむすりふおさくし一合を吊以侍りし

萩の葉よはゆちり初風風の音も

わくくまのきく神女くすん

区一

袖ぬくはるる初くく萩の葉の

色かたきく風をひりし

○ 或同盆夜ふ七月十五百味五果を煮て佛に供はる

五果く何をくく云律の中は核果 東枕柿の秋 層果 柿

瓜やういの秋 殼果 かやういの秋 檜果 杉栢の裏丸をか 角果 大小豆を

心是を五果くく

○ 甚於鄙商家毎立用の利を事く一筆穀年く

言く人の憂多しと云事甲午夏我府下倉を雨振少く
穀麦五斗三四升をかしき事多し地味物の直是存して
倉に於ては割、米をも立用して其勢私多し、以て倉
を歩たひく、米日りの、省紙をさし土庶を考む
七月の初府中等^{法町}の市人米貨立用の初より、五捕れ
て獄小繫る事、作らざる、此を罪ありとも思ふ
事人彼の事、き、浮世の風俗を正し、併士も
教の直貴を、持て、こゝろ庶民の心を、
作らば仁の斗り、さし、

○ 琉球國より寸き出た真眼帝の唐土の布紙のこゝろ
して亦我國有る紙、似たり、學原にして、

つや、かた、紙、薩州縣王院傍の海より、其國南方の氣を
けて、葉の柔、粟、花、英、風、雅、を、先、も、國、制、の、爲、亦
其在、や、き、き、も、

去年十二月十九日の風、吹、尾府中、高、此、
船、船、形、政、也、
球、尾府中、高、此、
船、船、形、政、也、
球、尾府中、高、此、
船、船、形、政、也、
球、尾府中、高、此、
船、船、形、政、也、

○ 八月八日の暴風、尾府中、高、此、
船、船、形、政、也、
八月八日の暴風、尾府中、高、此、
船、船、形、政、也、
八月八日の暴風、尾府中、高、此、
船、船、形、政、也、

おたつく 歴死するも此石と多う市井村落是の
為にすらひきくもあつくりすも 田屋の旗元亦
幾とくもや愁田のくも言ひ漲り 下りく陸を登り
堤を登り松をくく波瀾の家流をく杖を沈む
川に亦流水激して畔咀度漬ゆ巽二洋号懐を
しや人氏の徳を交ふに松を街路の懐話たり久波
ものすし 扱も皮すし 惺惺と動をくく已く公を
くくもあつるも 蝸廬の志もとたやまき水傍に
くおしふきくひ房子傾き 籬壁をくくも火災
の懐をきくくくくもあつるも 且我方をくく乃
風かきくおしひすん 傍くもおろくふひの中著

若し傍の這箇の小幸まあすも 中く道程を渡りて
思ひにくあぬ遠よりきよといひ傍りくも 或衆門空て
きくもくも 大方浮世を思ひすもあきぬは未もくも 知れ
傍りかゝる風雨もくも 念をくく傍りくも 大漸の
秘斗りたききこも 志もくく傍りくも 我ふくくつはく
あきりくくも 是く傍りくも 知りくくあつるも 我も
人も 大漸に傍りくも 執事たきき志を携ち 劣害小遇て
たすもくも 掃をきき傍りくも 此後をくも かくもくも
各地あつるも 只秋貢の少きくも 江戸を思ひくも 民
の思ひくも 早水農家亦かゝるも せくけらまき人等
をあつるかゝるも 領家の屋敷をくも 安ん

ハ却てかまきし中ふ彼やとそ思ひしつゝんたとの
し本もあさふり一凡そい上下信
一向灸各のこちうそすき方なるを高貴に孤燈印
法物の虫を掃くありツリヨヒ糶をこくを掃をかく法度
國怒を犯して刑をうりて信めを中とて鐵物
の鰐油錨を舐くあり一終ふ獄よりそ水家を立
まかりて止も思ふしや馬の竊くする一勝のうそ
為りそをを食て辯給の利を追ひ空しく水上に
月を撈りて東塗西抹りつゝ思啼如思をを
揺尾憐を乞の如くしをを思水粒あや山た
公もよこすふうこき出侍るこころを思ふも一水

つねふかせる野分風子の庭意事たりて水西
の白猫きけふの色たぬ衣んふも依報の妙き
きよ思ひ出り水厭禪の公更に新たり慈苦病骨
を纏ひく夢を枯下しそ人日何事をう控難
しつゝてあつゝもとまうり信侍んやしや爰
もそんそ法ののびんとくもかくてもは人群衆善舎
同し嵐ふもそふもそを満方の風流流しつゝ
つ片の秋光惨しつゝ更深漏静小月夜河傾て
美彩信不寂寥つゝもきけふつゝも浮世のすこ
そ風性のりのりちち道たあことそをそし
人間の業粘もつゝ板をぬるつゝのころ粘結

素もいりりきぬれもく四壁や下れく虫の夜をい

をり秋のあともれもこころやいそぎをいそぎをいそぎ

まぐのきりくはきやいそぎの涙をいそぎの涙をいそぎ

古くおきし侍りてきりくをいそぎのおし事をも

あかきりり

乃し海にきききききききききき

あかきりりりりりりりりりりりり

あかきりりりりりりりりりりりり

あかきりりりりりりりりりりりり

